

強く
ニューゲーム!

とある人気実況プレイヤーの
VRMMO奮闘記

"Tsuyokute" New Game!

2

邑上●主水

むらかみ
もんと

主な登場人物

クロシエ

人気No.2の妖艶女性「魔術師」。
雷系統の魔法を駆使する。

アラン

蘭が元々使っていたアバター。
人気実力ともにNo.1の「侍」として
ドラゴズクロニタに君臨する。

ラミレジィ

アランの熱狂的なファン。
見た目通り強気な性格の女「侍」。

エドガー(江戸川蘭)

リアルではポッチの高校生。「アラン」
であることを隠して、クラスメイトとドラ
ゴズクロニタをプレイすることに……

すず(二ノ宮すず)

蘭もひそかに憧れる清楚で
優しいクラスのアイドル。
クラスは「聖職者」。

ウサ(終由佳子)

アランに憧れてゲームを
始めたというモーム種の
「侍」。

ヤマブキ(山吹)

チャライ軟派男だが、意外
と礼節をわきまえている。
クラスは「騎士」。

アンドウ(安藤)

考えるより先に行動して
しまう猪突猛進男。
クラスは「戦士」。

メグ(佐々木恵)

すずの友人。
気が強くて男勝りな性格。
クラスは「盗賊」。

目次

第一章 アランのお仕事！ 7

第二章 ウサのお仕事！ 122

第三章 チョコレート狂想曲 144

第一章 アランのお仕事！

ゲーム「ドラゴンズクロンヌ」の人気実況プレイヤー、アラン。彼が生産部屋クラフトルームとして使っている武家屋敷風ホームハウスの一室は、生産だけを楽しんでいる「職人」と呼ばれるプレイヤーたちにとって垂涎すいぜんの的だった。

部屋に設置された漆塗りうるしの本棚に並べられているのは、生産に必要な数多くのレシピブックだ。そこに並べられているのは、一般販売されているものだけではない。

最上級の刀が生産できる【片手刀生成秘伝書】や、最上級の軽装系防具が生産できる【クリスタ防具生成秘伝書】といった、レアリティが高いレシピブックも豊富にある。

レアリティが低い多くのレシピブックは、ゲーム内通貨であるマニラさえ払えば購入できる。だが、レアリティの上位二類「アーティファクト」と「レジェンダリー」のレシピブックは、キーアイテムと呼ばれる素材を手に入れたプレイヤーしか購入できない。おまけに、その金額も目が飛び出るほど高かった。

「さて、今回手に入れたのは……【エレメント防具生成秘伝書】だが」

風情のある簾が揺れる武家屋敷の二階。クラフトルームというよりも、書齋じみた座敷部屋でレシブックを片手に持つアランの姿があった。

視界に映っているのは、いつもの動画配信画面。

今回の実況配信は多少趣向を変えて、アイテム生産を配信することにした。

「覇竜ドレイクの素材がキーになって購入できたレシピなんだが……お、これは、重装系鎧の生成レシピだな」

『マジか！ 何が作れるんだ!?』

『重装系って言ったら、騎士か戦士か?』

「まあ待て、慌てるな。ちゃんと教えるから」

熱が入る動画配信のコメントウインドウを横目に、アランはレシブックに目を通していく。

重装系とは、防具の種別を指す言葉だ。

プレイヤーが装備できる防具には「重装系」「軽装系」「衣服系」といくつか種類が設定されている。どの職業でもすべての防具が装備できるが、系統によってメリット・デメリットが存在している。

重装系の防具は、その名のとおり、厚い装甲に覆われた鎧のことを指す。防御力が非常に高いものの、俊敏性ステータスにマイナス効果があり、また追加で付与されるステータスアップ効果がないのが特徴だ。

軽装系の防具は、主に革や合皮といった軽い素材で作られたものを指す。重装系と比べて防御力

は低いが、俊敏性ステータスにマイナスがつかず、逆に「俊敏性増加」や「スタミナ消費緩和」といった追加効果があるものが多い。主にスピードを活かすクラス、盗賊や格闘士、そして侍などと相性が良い装備と言える。

そして、衣服系の防具は軽装系よりもさらに防御力が低く、装備してもダメージカット能力が皆無という特殊さだが、軽装系よりもさらに追加効果が高い。「知力増加」や「炎系魔術ダメージ加算」のような魔術系の追加効果も多く、魔術師や聖職者、召喚士などの魔術職が好んで装備している。

ちなみに衣服系装備にはデザイン性が高い、いわゆる「おしゃれ装備」と呼ばれるものが多くあり、街に滞在しているときにファッションとして着用するプレイヤーも少なくない。

ドラゴンズクロンヌでは、スキルビルドと合わせて、この自由にチョイスできる防具構成により、幅広いプレイスタイルを作ることが可能になっている。

例えば、回復職である聖職者が極限まで防御力を高めた重装系の鎧に身を包み、ロッドを手にしたすらMobを殴り続けるというプレイも可能だし、俊敏性アップの追加効果でステータスをブーストさせた身軽な戦士など、クラスのイメージを覆すプレイスタイルも可能だった。

「む……エレメント系防具ということは、漆黒の血族の名前が付いた防具なのか。ああ、これは……この前倒した『黒騎士ブラックモア』の鎧だな。なかなかカッコイイデザインの防具だ。素材は揃ってるから今から——」

「アラン様」

と、ふわりと耳に飛び込んできたのは、サポートノンプレイヤー^{N P}キャラクター^C、ソーニャの声だった。

「……なんだ？」

いつもであれば耳心地の良いその声。だが、このときだけは思わず眉間に深々としわを寄せてしまった。

常日頃、動画配信中はよほどのことでない限り声をかけないで欲しい、とソーニャに伝えている。余計な会話が配信に乗ってしまえば、動画のクオリティにも影響してしまうし、アーカイブ化するときにその部分をカットする作業が発生してしまうからだ。

「……ああ、っと」

だが、ソーニャの隣に見えたプレイヤーの姿で、なぜソーニャが声をかけてきたのかがアランにもすぐに理解できた。

このホームハウスには、許可を出したプレイヤー以外は立ち入ることができない設定になっている。プレイヤー検索で誰のホームハウスかはすぐにわかってしまうし、そうすればファンが押しかけてくるからだ。

そして、アランが許可を出しているプレイヤーはひとりしかいなかった。

「皆、すまない。お客さんが来たみたいだ。配信は一旦終了して、三十分後に再開するよ」

そう言った瞬間、実況配信のコメント欄がにわかにざわめき出す。

リスナーたちは当初「一体誰が来たんだ」と不審がっているだけだったが、やがて「まさか彼女か」「爆発しろ」と妙な方向に熱を帯びていく。

そんなわけあるか、と突っ込みたくなったが、口で言うよりも見せた方が早いと思ったアランは、入ってきたプレイヤーを配信画面へと映し出した。

一気に落ち着きを取り戻すコメント欄が少し面白くもあった。

「お、おいアラン、俺を映すな」

まるでパパラッチにオフショットを撮られたどこぞの芸能人のように、恥ずかしそうに顔を隠すその男。アポなしで来た罰だと言わんばかりに、アランはしばらくそんな彼の姿を楽しんだ後、お決まりの文句で締めくくった。

「というわけで、来たのはDICEの五十嵐^{いがらし}さんでした。それじゃあ、Adens^{またね}！」

ソーニャの隣に立っていた男は、ファンタジーの世界に似つかわしくない、黒いスーツを着こなしている長髪の優男^{やさおとこ}、五十嵐。

彼はアランのスポンサーであるアパレルブランド、DICEの広告担当者だった。

現実世界の自身の姿をコピーして作ったという五十嵐のアバターは、長い手足でスーツが似合う

だけでなく、整った目鼻立ちから、日本人離れた雰囲気さえ感じる。それに、仕事にかける熱意も相当なもので、その容姿と相まって、現実世界ではモテる部類に属する男性なのだろう。

都会のサラリーマンは、皆、五十嵐のような感じなのかもしれない。

クラフトルームを離れ、一階の居間へと移動したアランは毎度のごとくそんなことを考えていた。

「すまないね、アラン。配信の邪魔をしてしまつて」

「構いませんよ。でも、急に来るなんて珍しいですね」

これまでも、五十嵐がこのホームハウスに来たことは何度もある。もちろん遊びではなく、DICEの仕事でだ。

だが、今までいきなり来ることはなかった。メールで日時をすりあわせてから訪問することが常で、配信中に来たのは初めてだ。

「あれ？ メール送つてなかったか？」

「ええつと……来てなかったよな、ソーニャ？」

傍で静かに佇んでいたソーニャにそう訊ねる。

「はい。五十嵐様からのメールは一ヶ月前の【ブリザリアシリーズ】売上に関する連絡以後、来ておりません」

「あゝ、マジか。すまない。うつかりしていた」

手のひらで額を押さえ、渋い表情を浮かべる五十嵐。今日は、運良くアランでログインしていた

からよかったものの、できるビジネスマンである五十嵐らしくないミスだ。

「なんだか忙しそうですね。例のイベントですか？」

「まあな。これはオフレコなんだが、『TOKYOサマーコレクション』の会場運営の件で、スポンサーと運営委員会の間で一悶着あつたらしくてな。大幅なタイムスケジュールの変更が入ったんだ」

五十嵐の口から思わず漏れ出した、らしくない重いため息から想像するに、相当参っているのだろう。

『TOKYOサマーコレクション』とは年に一回、夏に行われているファッショニイベントで、即売会が付随するファッションショーのことだ。

DICEだけでなく、他のドラゴンズクロンヌ内で実況プレイヤーとスポンサー契約を結んでいるアパレルブランドも数多く参加している。

「俺は一参加企業に過ぎないから、それほどではないと思う。一番きついのは、イベントの運営委員会だろう。運営は運営のプロに任せておけと言いたいんだが、政治力の関係でどうもそうはいかないらしい」

「なんというか……大変ですね」

学生の身分である自分にはよくわからない話だったが、雰囲気的に大変だということはなんとなくわかった。

「えーと、それで……今日は？」

「……あゝ、悪い。つい愚痴をこぼしちゃった」

五十嵐の心労をおもんばかってか、ソーニヤが「とりあえず落ち着いてください」と囲炉裏付きの和風テーブルに、ふたつ陶器の湯呑を置いた。

五十嵐は、ソーニヤに軽く会釈すると、茶とともにその憤りを喉奥に流し込まん湯呑に口をつける。

「実は、今日君のところに来たのは、その『TOKYOサマーコレクション』と関係している。いつものようにウチの商品のモデルになつてもらいたいんだ」

「……？ ええ、もちろん大丈夫ですが」

五十嵐の依頼に、アランは首を傾げてしまった。

それがアランの仕事であり、これまで何度も行われてきたことだからだ。

DICEがゲーム内で販売している装備のデザインは、ゲームオリジナルのものもあれば、現実世界で実際にDICEが売り出している衣服のデザインをそのまま流用したものもある。アランがモデルとして撮影するときは、主に後者が多かった。

「ただ、今回はいつもと少し違うんだ。運営側からの依頼で、イベントに参加しているブランド同士でコラボレーションをすることになった」

「コラボレーション、ですか」

「これまで、他ブランドのモデルと同じ写真に出ることはなかったからな」

「それでイベントに話題性を出すってことですね」

自分にその話が来たということは、他のドラゴンズクロンヌプレイヤーとスポンサー契約を結んでいるブランドとコラボレーションする、ということだろう。

だが、話題性を出すと言っても、一体どのブランドとコラボレーションするのだろうか。

DICE以外にも、多くのブランドがプレイヤーと契約を結んでいるが、これといって話題になりそうなブランドはない。

「それで、どこなんです？」

そう訊ねたアランの顔を見て、鼻の頭を掻く五十嵐。長年の付き合いでなんとなくわかった彼の癖。これは気まずい何かが起きたときの仕草だ。

「それが、『Twinking』なんだ」

「……え？」

その名前を聞いてアランは目をぱちくりとさせてしまった。

「Twinkingは、幅広い女性をターゲットにしたアパレルブランドだ。落ち着いたデザインから、ティーンが好む派手で可愛いデザインのものまで幅広く取り扱っていて、女性からの支持も高い。

そして、そのTwinkingがスポンサー契約を結んでいる実況プレイヤーは、アランもよく知るプレイヤーだった。

「選定に作為はないと言っていた。ウチとTwinkingが当たったのは、まあ、偶然だと思う」
「いや、そうだが」

気まずさを喉奥へ押し込むように、アランは湯呑に口をつけた。

やけにお茶が苦く感じたのは、気のせいではないだろう。

「……しかし、色々な意味で話題性はありますね」

「俺もそう思う」

五十嵐が少し気まずそうに笑う。

正直なところ、アランがドラゴンズクロンヌの世界で唯一、会いたいと思っていたのがTwinkingとスポンサー契約を結んでいるプレイヤーだった。

しかし、そのプレイヤーと簡単に会うことはもちろん、相手とコラボレーションをすることの難しさは、アラン自身もよくわかっていた。

向こうがこちらに対して敵愾心に近い感情を持っている可能性は高いだろう。何しろ、先日ドレイク戦で、縮まりかけたランキングの差がまた開いてしまったからだ。

お互いのことを知り、意識しながらも交わることがなかった二つの線——

Twinkingがスポンサー契約を結んでいるプレイヤーの名は、クロシエ。

アランの登場から長きにわたり苦渋を味わっている、実況動画ランキング二位の女性プレイヤーだ。

実況動画ランキングは、プレイヤーの実力を測るものさしとして活用できる重要なランキングだ。

上位ランカーには企業から声がかかることがあるため、ランキングをひとつでもあげようと血眼で動画をアップするプレイヤーも少なくない。「ランキングが近いランカーはライバルである」と考えるプレイヤーは多く、ネット上で信者たちが批判しあうことも珍しくないほどだ。

だが、実際はそれほど複雑ではなかった。上位ランカーたちはお互いをライバルとして認識はしているものの、いがみ合うことはなく、隠れて交流が持たれることが多かった。

「同じゲームをプレイしている者同士、仲良くやろう」というのが全体的な考えなのだ。

だがひとり、アランに対しては違った。

彼だけはそういった上位ランカーたちからも批判されることがある。

それは、長きにわたりランキング一位を維持し、トップに君臨しているからこそ、浴びせられる批判だった。

ゆえに、アランはそのコラボレーションにあまり乗り気ではなかった。クロシエも他の上位ランカーと同じ考えを持っているかもしれないのだ。

向こうもお金をもらっている「プロ」である以上、撮影の現場に現れないことはないだろう。

だが、積極的に取り組むことと、現場に渋々来ることは同じではない。

「撮影は来週の土曜日、カメラマンは『Twinkling』の専属カメラマンが来るらしいから、DICEから行くのは俺とノブだけだ」

立派な唐破風の玄関で、もう一度確認するように五十嵐がそう言った。

ノブは、これまで何度も仕事をしているスタイリストだ。現実世界でもプロのスタイリストらしいのだが、こちらの世界でも衣装の選定や、カスタマイズできるヘアスタイルの選定などを行っている。

「大丈夫です。しっかりスケジュール空けましたから安心してください」

笑顔でそう返すアラン。

だが、その言葉は単なる虚勢で、すずたちには用事でログインできないことを伝えないといけないが、何かスケジュールが入っていたわけではなかった。

特に何も突っ込みをいれてこなかったソーニャは、さすがは空気が読めるサポートNPCだ。

「あ、そういえば」

と、何かを思い出したアランが、立ち去ろうとしていた五十嵐を引き止めた。

「撮影する場所って教えてもらっていましたっけ？」

「……マジで今日はグダグダだな。悪い、言ってなかった」

五十嵐が慌てて開いたウインドウに表示されていたのは、ドラゴンズクロンヌの地図だった。

「今回はここが現場だ」

五十嵐が指さしたのは、大陸の端を通り越し、海を跨いだ先。

小さな島々が並んでいるエリアだった。

「ここって……プラージュ諸島ですか？」

「そのとおり」

「つてことは……もしかして撮影は砂浜ですか？」

無言で頷く五十嵐。

プラージュ諸島はクレッシェンドよりもさらに南方、船を使って行く必要がある美しい海に囲まれた島国だ。その美しい海と、プラージュ諸島の代名詞にもなっている砂浜が特徴で、観光や海水浴を楽しむために訪れるブレイヤーも多い。

だが一方で、付近の海域や島を覆い尽くす熱帯雨林には高レベルのMobも多く、プラージュ諸島は危険が伴う場所でもあった。

「集合はヴェルン大公国のグランホルツで。そこから海路で向かうことになってる」

「今回もファストトラベルはなしですね」

プラージュ諸島に何度か行ったことがあるアランは、ファストトラベルで現地に飛ぶことができるが、撮影時にファストトラベルを使うことはそうなかった。

道中、ロケーション候補地以外でも気になった撮影ポイントを発見した場合に、急遽撮影を行う

ことがあるからだ。

「そうだな。少々長旅になるが、君とクロシエがいるなら問題ないだろう？」

「確かに」

クロシエもいるのであれば、たとえ漆黒^{ダークエレメント}の血族が襲いかかってきても問題ないだろう。むしろそのパーティがいるところは、この世界で一番安全な場所といえる。

「詳しいスケジュールは後でメールする。それと、わかつてると思うが、この件はオフレコで」

「クロシエも来ますし、情報が漏れたら、エリアの許容限界を超えるくらいのプレイヤーが集まりそうですからね」

「それだけじゃない。漏れてしまえば話題性が薄れてしまうし、情報守秘^{かんてん}の観点でもまずい」

こういった事案で一番まずいのは情報流出だろう。DICEの新作の情報がリークされてしまえば、ライバルに有利に働く場合もあるし、被害を被る企業もある。

スカウトされたプレイヤーが思わず情報を漏洩^{ろうえい}させてしまい、企画が白紙に戻された、なんて話は枚挙^{しとま}に暇^{いとま}がない。

「もちろんわかっています。ご心配なさらずに」

「ま、君に限ってはあえて言う必要はないと思うけどな。それじゃあ、リスナーによろしくな」

「はい。五十嵐さんもお仕事頑張^{がんば}ってください」

「……高校生に心配されるほど、やわじゃねえよ」

と言いつつも、先ほど伝達事項に漏れがあったことを思い出したようで、頭を掻^かきながらバツが悪そうにホームハウスを後にした。

五十嵐の身体がじんわりと白く発光し、小さな光の粒へと変わっていく。

風に揺れるように空へと舞い上がる、光の粒たち。

「いいですね、海」

「……ん？」

と、その光景をぼんやりと眺^{なが}めていたアランの耳を静かに撫^なでていったのは、ソーニヤの声だった。

「プラージュ諸島の海はとても美しいと聞きます」

「そうだな。何度か行ったことがあるが、まさに南国って感じだった」

「羨^{うらや}ましい。同行できないのが悲しいです」

本当にさみしげに肩を竦^{すく}ませるソーニヤ。

先日、エドガーで行ったミュージンが初めての同行だったが、ウサのおかげであまりいい思い出はいかなかった。ソーニヤの落胆^{らくたん}っぷりを見る限り、仕切り直しをしたほうがいいのかもしれない。「じゃあ、撮影が終わったら行こうか？ まあ、プラージュ諸島までだいぶ遠いから、時間はかかると思うが」

「本当ですか？ でしたら逆に、時間をかけてゆっくり行きましょう。この前も急ぎ旅だったので」「う、確かにそうだな」

途中で余計なウサ耳少女が付いてきたからな、とは心の中で付け足した。

「そうだ、先日のクラン立ち上げに協力いただいたお礼でウサさんもお誘いしてはどうでしょうか？」

「……え？」

「謝礼としてマニラをお渡ししていますが、プラージュ諸島の景色を見ればきっとウサさんも喜ばれると思いますよ」

「いや、あの……ソーニャ？」

「はい？」

本気か、と訊ねようとしたアランだったが、微笑みながら小首を傾げるソーニャを見て、その言葉はそつと胸の中に押し戻した。

「それとも、他のクランメンバーの皆さんもお呼びしますか？ クラン立ち上げのお祝い、というわけではありませんが」

「……」

アランはついに言葉を詰まらせてしまった。

先日のおつしー事件のときに、ウサの存在をちらつかせただけで、なぜかずの空気がピンと張りつめたことを、アランは忘れてはいなかった。

存在をほめかしたただけであれなのだ。彼女たちを引き合わせればどうなるかは言うまでもない

だろう。

それに、メグあたりと意気投合してしまうと、もつと恐ろしいことになってしまう。船に乗るだけで騒ぎ出すだろうし、プラージュ諸島の白い砂浜を見たら、もう手がつけられないことになる。

「皆さんのコンパニオンも連れてきていただいて、大人数で行けばきっと楽しいと思います」

「……何か凄（すご）いノリノリじゃないか、ソーニャ」

「そうですか？」

ソーニャが今まで見せたこともないような眩（くら）しい笑顔で見つめてくる。

すずたちとプレイしはじめて、ソーニャが変わったような気がするのはいすごしだろうか。

サポートNPCは、プレイヤーの思考パターンを分析して、学習する機能が備わっている。つまり、ソーニャが変わったということは、自分自身が変わりつつあるということ。

そう考えたアランだったが、「絶対にあり得ない」とその考えを自嘲気味に笑い飛ばした。

「……まあ、わかったよ、とりあえずメンバーに伝えておく」

「楽しみにしています」

「あんまり期待するなよ。乗ってこない可能性もあるからな」

なんとも複雑な心境になってしまったアランは、とりあえずそう返すと、動画配信を再開すべくクラフトルームへと重い足取りで向かった。

ふと振り返ると、ソーニャが変わらない笑顔でこちらを見つめている。

明らかに今までにない反応を見せているソーニャ。

まるで自分を鏡越しに見ているような錯覚に陥ってしまったアランは、顔を覆いたくなるような羞恥にかられ、思わず目をそらしたのだった。

ヴェルン大公国エリアの東部、シャルノ河に面した港街グランホルツ。

クレッシェンドへの定期船が出ているグランホルツは、サラディン盆地を突破した脱初心者プレイヤーたちが多く集まる街で、ヴェルニユートに次いで賑わいを見せている。

だが、グランホルツにプレイヤーが集まるのは、交通の便がいいからだけではない。

この地を訪れる理由の上位を占めているのは、この街の環境、つまり観光目的だった。

街の顔と言える、石畳の道が続く沿岸に並ぶおしゃれなカフェテラスに、思わずまどろんでしまいうような穏やかな気候――

まるで地中海のリゾート地を連想させるグランホルツは、殺伐とした狩りやPvP (Player versus Player) に疲れた高レベルプレイヤーまでもが、癒やしを求めてこぞって訪れるほどの場所だった。

そんなグランホルツの海沿い。美しい海と、停泊している四本の帆柱を持つ巨大なガレオン船が

一望できるカフェ「ブランタン」に、アランの姿があつた。

ログインするプレイヤーが最も多くなるコアタイムを外れているため、ブランタンにはそれほどプレイヤーはいない。まばらに席についているプレイヤーたちも、仲間内で午後のティータイムを楽しんでいるようで、アランのことを気にも留めていないようだった。

「チャイラテをひとつ」

店内をざっと見渡した後、アランはカウンターの向こうに立っていたカイゼル髭が似合う執事風NPCに注文を出した。

チャイラテは、現実世界と同じインド式ミルクティーのことだが、この世界では一定時間ステータスアップ効果がある。

グランホルツのカフェには、この他にも一定時間スタミナが減らなくなる「パンチエッタとマスカルポーネのサンド」といったメニューが並び、訪れたプレイヤーの舌を楽しませている。

ゲーム内で香りや味を楽しめるというのは、五感に刺激を与えられて遊ぶドラゴンズクロンヌの醍醐味のひとつだ。美しい景色を求めて世界中を回るプレイヤーと同じように、グルメなプレイヤーたちが、食を求め世界中を回り、毎日のようにSNSやブログにグルメレポートを掲載している。

「アランちゃん！」

カップを受け取ったアランの耳に、絡みついてくるような粘り気のある声が飛びこんできた。

「……ああ、ノブさん」

手を振りながらこちらに駆け寄ってきたのは、ド派手なショッキングピンクのシャツを着た男性。
件のスタイリスト、ノブだ。

短く刈り込まれた頭髮に彫りが深い顔立ち。厳つい系に属するノブはどこからどう見ても男性。アバターだったが、彼の挙動やしやべり方には、女性の雰囲気がある。

何を隠そう、ノブはいわゆる「オネエ系」のスタイリストだった。

「ちよつと、しばらくぶりじゃない？ 元気にしてた？」

「D I C Eからスポンサー契約を切られないくらいには、元気にやってますよ。えーと、ノブさんはミネラルウォーターでいいですか？」

「あら、久しぶりなのにアタシがカフェイン駄目なの覚えてくれたんだ」

「こっちの世界にカフェインなんてないんで、何を飲んでも平気だと思っただけですね」

「気分よ、気分」

アランは苦笑しながら、ミネラルウォーターをひとつ頼み、ノブとともにカウンターに設置された席に腰を降ろした。

「それよりも、先日の配信、生で観たわよ」

「え、配信？」

「あのでっかいドラゴンよ。ヒヤヒヤしたけど、さすがアランちゃんだわ」

「……ああ、ドレイクのことですね。わざわざ見てくれたなんて、ありがとうございます」

ノブは仕事以外でこちらに来ることはあまりないと言っていた。たまたま仕事で来ていたのかも
しれないが、時間を作って見てくれたのは正直、嬉しい。

「それで、今日はクロっちと一緒に撮影なんですよ？ アンタたちって面識あるの？」

「クロっち？」

「もう、クロシエのことよ」

「……ああ」

にんまりと笑みを浮かべるノブに、アランは苦笑いで答えた。

「面識はないです……というか、ノブさんはクロシエと面識あるんですか？」

「あら、言っただけだったわけ。アタシ「winking」の現場にもお呼ばれるのよ？」

ノブはD I C Eのスタイリストであるが、専属というわけではなく、他のアパレルメーカーとも
仕事をしている、と以前聞いたことがある。

クロシエと契約を結んでいる「winking」にも出入りしているのは知らなかったが。

「初耳ですね。クロシエってどんな人なんです？」

「んー、そうね。なんというか、クロッチは紳士的な女性ね」

「紳士的ですか。確かに動画からはそんな空気が感じられます」

クロシエの動画はこれまで何度も視聴してきた。

高いテクニクとクールな口調の女性で、世間ではアランに勝るとも劣らないプレイヤーという

評価だ。あの程度で自分と同レベルなんてまったくもって馬鹿馬鹿しい評価だが、彼女のプレイに華があるのは間違いない。

「あの娘、口調がちよっと冷たい感じだけど、よく気が回るし、将来はいい奥さんになると思うのよね。そのギャップが男性の心を驚掴みするポイントかも」

「なるほど。女子力が高いノブさんが言うと、なんだか説得力があります」

「うそ、ホント？ もう、アランちゃんったら上手いんだからっ！」

そう言っ、て、ばしばしと肩を平手打ちするノブだったが、グランホルツはプレイヤーキル行為禁止エリアのため、痛みも何も感じない。

「でも安心して。アランちゃんもクロッチと同じくらい可愛いから。ふたりが一緒に現場なんて、アタシすごく興奮しちゃうわ」

ノブの意味深な言葉にアランは思わずぐくりと唾を呑み込んでしまった。

ノブはオネエ系だが、可愛ければ男性でも女性でもどちらでもイケると、本人から聞いた記憶がある。Twinkingの広告に載っていたクロシエは、どちらかというと妖艶な系統の女性だったが、あれは「同じ女性目線」からすると可愛いに属するのだろうか。

「にしても」

ふと、カフェに設置されている時計に視線を送るノブ。

「イガちゃん、五十嵐、遅いわね」

「確かにそうですね。いつもなら最初に到着してるのに」

撮影の全体管理をしている五十嵐は、最初に待ち合わせ場所に到着することが多い。撮影のタイムスケジュールを確認したり、現地の天候変化についてドラゴンスクロンヌ運営と確認したりと、事前準備をする必要があるからだ。

だが、カフェに五十嵐の姿はない。それに、来ると言っていたTwinkingのスタッフの姿もない。時間にきっちりした五十嵐と、カメラマンやその他のスタッフも全員遅れている……なんてことはないはず。

もしかして、何かあったのだろうか。

「関係ないけど、こつちの世界じゃなくて現実世界の方でね、撮影現場に照明スタッフが遅刻したことがあったんだけど。あのときのイガちゃん、怖かったのよね」

「え、そうなんですか」

ポツリとこぼすノブに、アランは目をぼちくりとさせてしまった。

それは意外な話だが、なんとなくわかる気もする話だった。

五十嵐は普段は温厚だが、地雷を踏んでしまったら恐ろしそうな、そんな危険な空気を感じてしまふことがある。

「いつもどこか気が抜けてる感じだけど、現場に入ると急に締まるじゃない？ あのときはさらに、ピリピリして——」

「一体、何年前の話だ」

不意にアランたちの後ろから、どすの利いた声が放たれた。

そこに立っていたのは、いつもの黒いスーツに身を包んだ、五十嵐だった。

「あ、イガちゃん、オハ」

「おつかれさまです、五十嵐さん。ギリギリに来るなんて珍しいですね」

「すまない。ちょっと問題が起きてな」

眉を顰めながら謝罪する五十嵐の言葉に、なんとなく嫌な予感がしたアラン。

この場所に「Twinkling」のスタッフが来てないことと関係しているのだろうか。

「実は、「Twinkling」のスタッフが待ち合わせ場所を勘違いして、現地に向かってしまったらしい」

「あらら」

ノブが浮かべたのは「仕方のない人たちね」と言いたげな苦笑이었다。全く見当違いな場所に向かったのであれば、苦笑いではすまない問題だが、向かった先が現場ということであれば、五十嵐が気に揉む必要はないはず。

嵐が気に揉む必要はないはず。

嵐が気に揉む必要はないはず。

「他に何か問題が？」

「それが……何を考えたのか、途中で下船したらしい」

「え？ 降りちゃったんですか？」

船は一度乗り込んだら、どこかの港か、決められた停船地点に到着するまで外に出ることはでき

ない。

途中で下船したということは、どこかの停船地点で降りたということだ。

「イガちゃん、向こうの営業さんをビビらせちゃったんじゃないの？ あの照明さんを怒鳴りつけたときみたいに『お前ふざけるな』って」

「い、いや、そんなことは言っていない」

否定しながらも、鼻の頭を掻く五十嵐。何か気まずいことが起きているときの仕草だ。

ノブが言うとおり、多分向こうの営業を怒鳴りつけたのだろう。そして、それに焦った営業は慌てて下船した、と。

と。

と。

グランホルツからプラージュ諸島方面に出ている定期船は、リゾート地「サンフォオスタン」行き

の便だけ。サンフォオスタン行きで途中下船できる場所があったか、アランは記憶を辿るが、思い出

せなかった。

「それで、どこで降りちゃったんです？」

「ええと……ムラウってところらしいんだが、知ってるか？」

「え」

チャイラテのカップを持ったまま、アランは固まってしまった。

「ム、ムラウって、ムラウ鍾乳洞のことですか？」

ムラウ鍾乳洞は高レベル向けに用意されているダンジョンで、プラージュ諸島エリアの代表的M

o bである半魚人「サハギン」が住むダンジョンでもある。

サハギンは、別名「海の悪魔^{シーデビル}」とも呼ばれている、非常に厄介^{やっかい}なM o bだ。

彼らの主な武器はその鋭い爪なのだが、もうひとつ、彼らが悪魔と呼ばれる由縁^{ゆえん}の武器がある。

サハギンは設定上、遠くエルフの血を引く種族らしく、強力な魔術を使ってくるのだ。

「多分そこだと思う。入り口で俺たちを待っていたらしいが、魚みtainなM o bに襲^やわれて、奥に逃げ込んだらしい」

「どうしてそんなところにわざわざ降りちゃうかなあ。一回全滅してホームハウスに戻った方が早くない、それ？」

ため息交じりで漏らすノブに、アランも同意してしまった。

撮影で使うアイテムといえば、『twinking』で用意している衣服ぐらいだろう。全滅してダンジョン内にアイテムを落としたとしても、すぐに替えの衣服は手配できるはず。

「いや、そうもいかない。なにせ所持しているのは『twinking』の発表前の作品』なわけだからな。もしムラウ鍾乳洞に落として、誰かの手に渡ってしまえば大変なことになってしまう」

「……なのに、そんな危ない場所に行っちゃったの？」

「そういうことだ」

高ぶる心を落ち着けるつもりなのか、チャイラテをオーダーする五十嵐。すぐさま手渡されたカップになみなみと注がれていたそれを、一気に喉奥へと流し込んだ。

「でも、ですよ」

またたく間に空になった五十嵐のカップを一瞥^{いちべつ}し、アランが続ける。

「向こうには、クロシエがいるんですね？」

『twinking』とスポンサー契約を結んだ専属のモデルであるクロシエ。ムラウ鍾乳洞が高レベル向けダンジョンだと言っても、クロシエが一緒なら危険はないはずだ。

「いや、それが、な」

言葉を濁^{にご}しながら、五十嵐がふと背後に視線を送る。

その視線に誘導されるように、アランとノブの視線がそちらへと向けられた。

「……あ」

カフェ「ブランタン」の入り口。アランの目に映ったのは、ひとりのプレイヤーだった。

赤い刺繍^{しゅう}が施された黒いローブを着た、アランと同じ銀の髪を持つ女性。特徴的なのは、黒いローブとのコントラストが映える白い肌と、猫のような瞳――

「あら、クロっち」

そこに立っていたのは、『twinking』の広告で何度も見た、妖艶^{ようえん}さに危険な空気を伴わせた美しいデーモン種の女性、クロシエだった。

「お久しぶりです、ノブさん」

あっけらかんと問いかけるノブに、クロシエは小さく頭^{こゝろ}を垂れる。



その状況がいまいち把握^{はあく}できなかったアランは、しばし黙考してしまった。

「Twinkingのスタッフと一緒のはずのクロシエ。彼女がここにいるということとは――」

「ちょっと待ってください、五十嵐さん。Twinkingのスタッフたちは、彼女なしでムラウ鍾乳洞^{しやうりゅうどう}に――」

「現地集合だと思っていたらしいからな。残念だがそういうことになる」

「マジですか」

アランは頭を抱えてしまった。

ドラゴンズクロンヌ内で撮影を行う際、護衛として信頼がおけるプレイヤーを同行させるのが普通だ。だが、Twinkingのスタッフがサハギンに襲われてダンジョンの奥に逃げ込んだことを考えると、護衛は低レベル、もしくはは不在と考えていいかもしれない。

他のプレイヤーならまだしも、今回はランキング二位のクロシエがモデルなのだ。中途半端な護衛を数名雇うより、彼女自身に守ってもらう方が確実。

Twinkingのスタッフがそう考えていたとしてもおかしくない。

「というわけなんだ、アラン」

話の流れが理解できたアランは、そう切り出した五十嵐の言葉に顔を顰^{しか}めてしまった。

つまり、これからムラウ鍾乳洞に逃げた撮影スタッフを救出して、撮影に向かおうというのだ。

「……本当に申し訳なく思っている」

そう切り出したのは、じつとこちらを見つめていたクロシエだった。

「できるならば私とともに、彼らの救出を手伝って欲しい。責任はすべてこちら側にある」

そう言って頭を下げるクロシエに、アランは驚きすら覚えてしまった。

五十嵐が「twinking」の営業を恫喝（どうかく）したことが原因のひとつであるはずなのに、クロシエはすべては「twinking」側のミスだと言いつつ放った。

そう言うことで、相手は何も気負うことなく救出を手伝えるからとはいえ、なんとも律儀（りちぎ）な女性だ。ノブが言った「クロシエは気が回るいい子」という言葉が、アランの脳裏（のうら）に蘇（よみがえ）った。

「わかったよ。行こうか、ムラウ鍾乳洞に」

残ったチャイラテを飲み干し、アランはカウンターにカップを置いた。

いわばこれは、高レベル向けダンジョンに残された撮影スタッフを救出しろというクエストだ。

撮影スタッフがサハギンに殺されてしまえばゲームオーバーの高難易度クエスト。障害になるのは、こちらのレベルでもプレイヤースキルでもなく、時間。

なんとも億劫（おっくう）になってしまう状況だが、ひとつ救われたことがアランにはあった。

ちらりと視線を送った先。自分の肩越しに見えるのは、ノブと何やら思ひ出話に花を咲かせているクロシエの姿――

彼女はどうか、こちらのことをそんなに目の敵（かたき）にしているわけではなさそうだ。

船はどうも苦手だ。

グランホルツ発サンフォスタン行き定期船。甲板で風にあたっていたアランは、目が覚めるような美しい景色を眺（なが）めつつ、心の中でそう吐（は）き捨てた。

三半規管が刺激されることにより発生する自律神経の失調、いわゆる「船酔い」は仮想現実世界にはもちろんないものだが、ふわふわとした不快感は、ありがたくもリアルに再現されている。

アランはこれまで幾度（いくど）か船を利用しているが、その不快感には未だ（いまだ）に慣れなかった。

「アラン」

「ん？」

吹きつける風の音とともに、ふと女性の声のアランの耳を撫（な）でていった。

アランたちと一緒に定期船に乗り込んだクロシエだ。

「クロシエ？ どうした？」

「いや、大したことではないのだが、そういえばまだしっかりと挨拶（あいさつ）をしていなかったと思ってな」確かに、とアランもそのことに気がついた。

気もそぞろに、流れで定期船に飛び乗ってしまったから、仕方がなかったのかもしれない。

「……じゃあ、改めて。アランだ。よろしく」

「クロシエだ。今回は迷惑をかけてすまない」

こういったときは握手でもすべきなのかと考えたアランだったが、クロシエは特に握手を求めているわけでもなかったもので、軽く会釈する程度に止めた。

それにしても、とアランはクロシエの姿を見て思う。

デーモン種の女性アバターはどうも苦手だ。

以前すずたちを襲った魔術師もそうだが、デーモン種は高圧的で近寄りがたい雰囲気放っているプレイヤーが多い。そういう雰囲気が好きなの男もいるのだろうが、自分は苦手な部類だ。デーモン種に限らず、女性は全般的に苦手なのだが。

「動画は拝見させてもらっている。覇竜ドレイク討伐おめでとう」

「え？ あ……ど、どうも」

「予備動作なしの【ドラゴンプレス】を躲したのは見事だった。私なら直撃を受けていたかもしれない」

謙遜している様子もなく、「魔術職だったらどう対策するか」と考察しはじめたクロシエに、アランは思わず笑みを浮かべてしまった。

「何かおかしいことを言ったか？」

「いや、悪い。俺の動画を見ているって、社交辞令だと思っていた」

「私が動画を見ているのは変か？」

クロシエは小さく首をかしげる。

「いや変じゃない。実は……俺も君の動画は見ている」

「む、そうなのか」

「動画だけじゃなく、ブログも」

「う……なんだか恥ずかしいな」

少し頬を赤らめながら、気恥ずかしそうに視線を遠くへとそらすクロシエ。

どうやら感情を表に出さないわけでもないようだ。ノブが言っていたとおり、クロシエは見た目ほど冷たい女性ではないのかもしれない。

「クロシエは……クラス魔術師か。ビルドは何系？」

「雷系だ」

「雷系か。なら、サハギンには有効だな」

サハギンなどの海棲生物に特に効果が高い魔術が雷系魔術だ。

さらに、雷系魔術は他のツリー【炎系】【水系】【氷系】【土系】に比べて、広範囲に攻撃を加えられる魔術が多く、集団で襲いかかってくることが多いサハギンには特に効果的な魔術ツリーだった。

「それに、ムラウ鍾乳洞には何度か行ったことがある」

「それは頼もしいな。先導は任せていいか？」

「もちろんだ」

クロシエが力強く頷く。

通常、魔術師ウィザードのような後衛職は後方支援がセオリーだが、熟練者で高レベルの魔術師ウィザードで、さらに地理にも精通しているとあれば、先導してもらった方がいいだろう。

パーティのメインアタッカーは彼女に任せて、逆に自分はサポートに回る。

五十嵐たちには定期船の終着点であるサンフォスタンの街で待機してもらい、ふたりでスタッフの待つ場所へ向かえば、意外と簡単に合流できるかもしれない。

だが問題は合流した後、撮影スタッフと出口に向かうときだ。多数のサハギンに同時に襲われたら、撮影スタッフに被害が出てしまうかもしれない。最悪、自分がサハギンを足止めして、クロシエとスタッフに脱出してもらうことも考えておいた方がいい。

「見る、アラン」

ひゅう、と一陣の風が甲板を通りぬけ、クロシエのフードから溢こぼれる美しい銀の髪が大きくなびいた。いつの間にか、風は暖かい南国の風に変っている。

「プラージュ諸島か」

クロシエが指す先。美しいコバルトブルーの海の中に広がるいくつもの島々。

そして、まるでアランの言葉に返事をするように、停船を告げる甲高い鐘かねの音が辺りに鳴り響いた。

サンフォスタン行き定期船が停船したのは、ムラウ鍾乳洞があるムラウ島沖、つまり海のど真ん中だった。

定期船はチケット購入の際に、下船する場所を選定することができる。

サンフォスタンに向かうまでに下船できる場所は五ヶ所。その中のひとつがムラウ鍾乳洞にほど近いムラウ島沖だった。

「はあ……後は手で漕いでいけてわけね。なんとも素晴らしいサービスだわ」

定期船から下船する際に貸し出される小舟の中、自らすすんでオールを手にしながら愚痴ぐちをこぼしたのはノブだ。

「というか、ノブさんと五十嵐さんはこのままサンフォスタンで待っていた方がいいんじゃないですか？」

撮影場所が向こうなのであれば、合流場所はサンフォスタンでもなんら問題はない。

むしろ、余計な心配事が増えるからサンフォスタンに行ってもらった方がいいのだが。

「何言ってるの、アランちゃん。こんな面白いことをアタシが逃すわけじゃない」

「面白いことって……撮影スタッフの救出が、ですか？」

「そうよ。ランキング一位のアランちゃんと二位のクロッチが一緒にプレイするなんて、この先二

度とないかもしれないじゃない？」

確かに、クロシエとパーティを組むなんて、この先絶対にあり得ないだろう。

一回限りでアランとクロシエがムラウ鍾乳洞でパーティを組む。そんな動画を配信すれば、相当の視聴者数を稼^{かせ}ぎ出すに違いない。

「……相当の視聴者数……」

アランの脳裏に嫌な予感が過^よった。

嫌な予感の出どころは、ノブではなく、小舟の最後部でやけにおとなしくしている五十嵐だ。

定期船の中ではピリピリしながらどこかとやり取りしていた五十嵐が、小舟に乗るや否や急におとなしくなったのだ。

「五十嵐さん、もしかして……撮影してませんか？」

「え？」

五十嵐が浮かべたのは、「凶星です」と語っている慌^{あわ}てた表情だった。

「まさか生放送してるワケ？ イガちゃん？」

「い、いや、まさか。録画しているだけだ」

「録画してるんですか」

「あっ……いや、その、違うんだ、アラン」

何が違うのかよくわからないが、録画していることは間違いないらしい。

軽く問い詰めたところ、定期船を下船するときにはすっかり放送枠を購入していたことを自白した。

生放送してしまえばプレイヤーがムラウ鍾乳洞に殺到するため、事後、アーカイブをDICEの公式チャンネルにアップしようと考えていたらしい。

「ほら、場合によっては撮影が流れてしまうかもしれないだろう？ そのときの埋め合わせとして君たちふたりのプレイを動画に収めようと思ってる」

「何か定期船の中でもめていると思ったら……そのことを話していたわけですね」

てっきり撮影スケジュールの遅延でもめているのかと思ったら、そんなことだったとは。

確かに、今回の撮影が遅れてしまえば、イベントにも影響が出るに違いない。

どう責任を取るつもりだとDICE上層部から詰め寄られ、代案として出したのがクロシエとのパーティプレイ動画だった、というところだろう。

「というか、クロシエは平気なのか？ 勝手に撮影されるとまずいんじゃないか？」

「私は構わない。既に五十嵐さんがTwinkingの本社に断りを入れたようだから。さきほど連絡があった」

「……え？ 本当に？」

そう訊^{たず}ねたのは、五十嵐に対してだ。

「ま、まあな」

小さく肩を竦めてみせる五十嵐に、アランは呆然としてしまった。

五十嵐の機転の速さは見事というべきだが、それよりも、TwinkingはよくライブブランドであるDICEからの申し出に首を縦に振ったものだ。

常識的に考えて、クロシエがDICEの宣伝に使われることはないだろうが、動画の流れ次第では、Twinkingのブランドが傷ついてしまう可能性もある。

しかし、Twinkingが了承したということは、そういったリスクよりも話題性を優先したということなのだろう。

ライブブランドを言いくるめる話術といい、タダでは転ばない、さすが経験豊富なDICEの広告担当だ。

「まあ、Twinking側がOKを出したのであれば、俺からは何も言うことはありません。ただ——」船が向かう先、ムラウ鍾乳洞がある小島を見ながら、アランは続けた。

「ムラウ鍾乳洞は相当危険なダンジョンです。あまり俺から離れないように気をつけてください」良い画を撮ろうとカメラポジションに集中すると、周りが見えなくなってしまうことが多い。気がついたときにはすぐ背後にサハギンの群れがいた、なんてことになるかと面倒だ。

「心配するな、アラン」

と返してきたのは、五十嵐ではなく、クロシエだった。

「五十嵐さんたちに危険が及ぶことがないように、私も注意しよう」

自信ありげに胸を張るクロシエ。

アランはつい、「なぜ君が注意する必要があるのか」と突っ込んでしまいそうになった。

注意する必要があるのは、勝手に撮影を始めた五十嵐であり、好奇心で同行することにしたノブなのだ。

「……まあ、頼むよ」

「ああ、任せてくれ」

笑顔を覗かせるクロシエとは対象的に、アランは頭を抱えたかった。

なんとも身勝手なふたりと、冷静だがちよつとずれているクロシエ。一体この先どうなってしまうのだろうかと思案になってしまふ。

美しい海が奏でる波の音に溶けていく、アランの小さなため息。

そして、太陽のかけらが煌めく中に浮かぶ、ぽっかりと開いた不気味な洞窟の入り口が、アランの目に映った。

サハギンたちが住むダンジョン、ムラウ鍾乳洞——

号鐘の代わりに、浅瀬に乗り上げた小舟は「ごこん」と鈍い音を放ち、アランたちに到着を告げたのだった。

ムラウ鍾乳洞は、以前はプレイヤーがこぞって訪れる、人気のダンジョンだった。

孤島にあるダンジョンにしてはとても広く、サハギンの再配置間隔も短く設定されているので、安定してレベル上げができるおいしい「狩場」だったからだ。

だが現在、ムラウ鍾乳洞に訪れるプレイヤーは少ない。

理由は簡単で、狩場の固定化によるマンネリ化を防ぐために、運営が同レベルの狩場を他の地域にいくつも設けたからだ。その結果、もともとアクセスの悪さに定評があったムラウ鍾乳洞を訪れるプレイヤーは激減した。

たまに訪れるのは、この場所で受けることができるクエストや、そこそな値段で取引されている「重晶石」や「クローム鉄鉱」といった素材を狙う一部のプレイヤーだけ。今のムラウ鍾乳洞は、「過疎ダンジョン」といえる場所だった。

「撮影スタッフがいるのは……結構奥のようだ」

薄暗いダンジョンの奥から漏れ出してくる湿った生臭い空気と、サハギンたちのものと思われる低い呻き声に乗ってきたのは、メニュー画面を開いているらしき五十嵐の声だ。

奥にいるという例の「Twinkling」の営業と連絡を取り合っているのだろう。

「大体の位置はわかりますか？」

「入り口から数えて二、三個目の開けた場所だと言っているが……よくわからないな」

「座標がMAPに表示されていると思うのですが」

「座標？ ……ああ、『C2』付近だそうだ」

「C2……随分奥だな」

そう囁いたのは、渋い表情のクロシエだ。

大抵のダンジョンがそうなのだが、ムラウ鍾乳洞も奥に行けば行くほど危険が増していく。

特に注意する必要があるのが、中々高レベルの水属性魔術を放ってくる魔術に特化した「サハギン・ハンマーヘッド」と、サハギンの群れのリーダー格で、身体が巨大な「ホワイトサハギン」だ。

アランとクロシエのふたりがかりであれば簡単に処理できるレベルのMobだが、五十嵐やノブ、それに撮影スタッフが遭遇してしまうと、ひとたまりもない。

「……そこまで進んでいるのなら、突っ切った方がいかもしれないな」

しばし黙考したクロシエがひとりごちるようにぼつりと呟いた。

「突っ切るって、ダンジョンをか？」

「ん？ ああ、そうだ」

さらりと言うクロシエに、アランは耳を疑ってしまった。

「いや、それは無理だろう。深部にはホワイトサハギンがいる。奴に見つかったら、彼らはあっという間に全滅してしまうぞ」

「突っ切ると言っても、逆側にもある入り口に向かうわけではない。向かうのは『トリトンの入り」

江』だ」

「……ああ、なるほど」

トリトンの入り江とは、ムラウ鍾乳洞の東側から行くことができる小さな入り江だ。

その昔、プラージュ諸島を統治していた王が、島々を荒らしまわるサハギンを討伐するために海の女神トリトンを召喚した場所として伝えられている美しい入り江——という設定らしい。

「なるほどね。入り江に抜けければファストトラベルもできるってわけか。クロちゃん冴えてるわ」
トリトンの入り江は周囲を断崖絶壁に囲まれている出口のない空間だったが、ダンジョンではなく、フィールドと認識されている場所だった。つまり、入り江に出れば、そこから街にファストトラベルが可能だということ。

「うん、いい考えじゃないか、アラン？」

そう訊ねてきたのは五十嵐だ。

確かにクロシエの言うとおり、入り江に向かえば、ホワイトサハギンに絡まれることもないだろうし、ダンジョン内で迷ったりはぐれたりする心配もない。

まったくもって素晴らしいアイデアだ。良いアイデアすぎて少し癪に障ってしまうが。

「とりあえず、それで行こう。話したとおり、メインアタッカーは君に任せるよ、クロシエ。魔術の詠唱中に攻撃を仕掛けてきたサハギンは俺が処理する。安心して詠唱に集中してくれ」

「わかった。頼む」

「五十嵐さんとノブさんは、俺とクロシエの後ろでおとなしくしててください」

五十嵐とノブのアバターはこっちで仕事をするときだけのキャラだが、もちろんクラスは設定している。ノブが戦士で五十嵐が格闘士だ。だが、ふたりのレベルは一桁。

つまり、少なくとも今の状況においては、ふたりは前衛を任せられない前衛職ということになる。

「万が一のときは回復役として立ち回るよ」

「グランホルツで可能な限り回復薬を購入してきたわ。サポートはアタシとイガちゃんに任せて」
パーティの経験はそうないはずなのだが、五十嵐とノブは「前衛ができない前衛職」の立ち回りをわかっているようだった。

パーティに回復職である聖職者がいない場合、一番レベルが低いプレイヤーが回復役として立ち回ることがある。

高レベルだとはいえ後衛職の魔術師であるクロシエは、被弾してしまうとそこそこ痛いダメージが通ってしまうだろうから、回復薬でサポートしてくれるのはありがたいはずだ。

「では、行きましょうか」

パーティを先導するように、アランが最初にダンジョンの中へと足を踏み入れた。

最初の目的地は座標C2。撮影スタッフたちがいるダンジョンの深部だ。

一口にダンジョンといっても、ドラゴンズクロンヌには様々な種類のダンジョンが存在している。一番オーソドックスなのは、自然が作り上げた迷宮といえる洞窟タイプのダンジョンで、ムラウ鍾乳洞もそれに当たる。

次に多いのは鉱山や地下道、廃墟と化した古城や廃砦、遺跡や地下牢獄など「人の手が関与したタイプ」のダンジョンだ。

ダンジョンを探索する際には、そのダンジョンがどの種類に属するのか事前に調べておくことが非常に重要になってくる。人の手が関与しているタイプであれば、施錠された扉を開けるために専用のアイテムが必要になるかもしれないし、洞窟タイプのダンジョンであれば、毒素が滞留している場所を進むために、解毒薬や解毒魔術が必要になるかもしれない。

準備次第で攻略の時間が大幅に変わり、下手をすればパーティが全滅の危機に陥ることもある。

そして、洞窟タイプのダンジョンを探索する際に重要なのは、光源。

つまり、ランタンや松明だ。

「魔術師がいれば松明いらずになるなんて知らなかったわ」

湿度が高い澱んだ空気が充満するムラウ鍾乳洞の中、先頭を歩くクロシエを見ながら、ノブが感嘆の声を漏らした。

クロシエやアランの手に松明は持たれていないが、辺りはぼんやりとした青白い光で照らされて

いた。

その光源は、クロシエの傍に浮かんでいる青白い光球。彼女が使ったのは、一定時間、空中に浮遊する光球を呼び出す【フライト】という魔術だった。

【フライト】は松明の代わりになる魔術ですが、効果は松明やランタンより悪く、デメリットは変わりません。より鮮明に周囲の状況を知りたいければ、松明やランタンを使った方がいいですよ」

「……デメリットとは？」

警戒しながら歩みを進めるクロシエに訊ねたのは、最後尾で撮影をしている五十嵐だ。

「光源はムラウ鍾乳洞のような、光が届いていないダンジョン探索に必須なのですが、Mobを引き寄せてしまうというデメリットがあります」

「ああ、つまり、戦闘を避けたい場合は明かりを消して進む必要があるわけか」

「そのとおりです。光源が必要になる洞窟タイプのダンジョンは難易度が高くなるのが通例です」「なるほどね」

はあ、と感嘆のため息を漏らした五十嵐に、クロシエは小さく笑顔を向ける。

アランはぼんやりと浮かび上がったクロシエの笑顔を見ながら舌を巻いてしまった。

さすがはランキング二位のプレイヤーというべきか。

クロシエが口にしたような「身を守る知識」は、ドラゴンズクロンヌをプレイする上でとても重要な要素だ。知識があれば、立ち入らなくてもいい危険な場所に自ら足を踏み入れることはないし、

不必要な戦闘を避けることができる。

特にパーティを先導するようなリーダーには必須の情報といっていだろう。

「クロシエって、頼りになるリーダーって感じだな」

と、アランにそっと耳打ちしたのは、いつの間にかすぐ傍まで近寄ってきていた五十嵐だった。

「え？」

「豊富な知識に安心感。さすがは一流プレイヤーというだけはある。人気が出る理由がわかったよ」
何か含みがあるセリフ。あえてそちらは見なかったが、五十嵐は確実によからぬ笑みを浮かべているだろう。魂胆が見え見えな五十嵐のセリフに、アランは思わず苦笑してしまった。

「そんなこと言っても無駄ですよ、五十嵐さん。クロシエと張り合うつもりはないですから」

五十嵐は、撮影が中止になってしまったときのことを考えている。

特定のプレイヤーを追ったドキュメンタリー形式の動画コンテンツで重要なのは、ド派手な戦闘シーンに代表される「盛り上がり」だ。ドラゴンズクロンヌを代表するふたりのプレイヤーが同じ場所にいるのであれば、その盛り上がりを作るのは非常に簡単だった。

お互いのライバル意識をくすぐり、対立構造を作るのだ。

お互いが争うようにサハギン狩りでも始めたら、視聴数を稼げる動画コンテンツのでき上がりだろう。

ほんの少しやつてもいいか、と考えたアランだったが、五十嵐にいいように踊らされているよう

な気がして、王者としてのプライドが邪魔をする。

「ダンジョンの奥で待っている撮影スタッフと合流。ムラウ鍾乳洞からの離脱。それと浜辺での撮影。目的はそれですよね？」

「いや、そうなんだがな」

「何か？」

「正直なところ、君よりもクロシエの方が……な？」

「……？ クロシエの方が、何か？」

五十嵐はじつとクロシエを見据えたまま何かを考え、そして静かに続けた。

「まあ、君を焚きつけようとしたことは認めよう。だが、それは君を思っでこそだ。このまま終わってしまうと、リーダーとして相応しいプレイヤーは、アランではなくクロシエだったと知らしめることになるそうじゃないか？」

「……え？」

その言葉にひくき、とアランの表情が固まってしまった。

五十嵐がどこから撮影を開始したのかはわからないが、ダンジョンに入る前から始めていたと考えていいだろう。つまり、クロシエがトリトンの入り江に抜けた方が安全だと提言し、明かりの重要さを説いた上で、みずからパーティを先導している姿が記録されているということだ。

前衛職である侍、それも「アラン」がパーティにいながら、後衛職であるクロシエがこの先で待

つ撮影スタッフとパーティのことを考え、危険を顧みずリーダーシップを発揮していると取られてもおかしくない。

そう、この動画を見た視聴者は口々に言うだろう。

もしかして、リーダーとして優れているのは、アランではなくクロシエなのではないかと――

「おい、注意しろ、アラン。敵だ」

と、先頭を歩くクロシエが足を止め、警戒の色を強めた。

クロシエの光球が照らした先。そこに見えたのは、鱗を持った人型のMob――サハギンだ。

「……クロシエ、下がれ」

「え？」

クロシエが魔術の詠唱に移ろうとした瞬間、前触れもなく動いたのは、サポートに徹すると公言したはずのアランだった。

音もなく腰に携えた白刃の片手刀「天羽々斬」を抜くと、即座に【地走り】を発動させた。

濡れた地面から舞い上がる飛沫。

瞬く間にサハギンの集団に肉薄する白銀の影。

その影にMobが反応するわずかな時間、彼の刃は鱗に覆われた身体を容赦なく捉えた。

【中段の構え】の【斬り込み】から【天剣】へ繋げる強力なコンビネーション――

そして、アランが駆け抜けた後に残されたのは、サハギンたちの骸だけだった。

「おお、凄い」

「アランちゃん、さすが」

数体のサハギンを瞬殺したアランに、五十嵐とノブは感嘆の声を漏らした。
瞬きすら忘れてしまうほどの圧倒的な力。

だが、それを目の当たりにしたクロシエは、訝しげな表情を浮かべていた。

「どういうことだ、アラン。メインアタッカーは私ではなかったのか？」

「悪いが、クロシエ――」

クロシエに背を向けたまま、アランは静かに続ける。

「やはりサハギンどもは、俺がすべて斃す」

「え？」

急に考えを百八十度変えたアランに驚いたのは、クロシエだけではなかった。

「……イガちゃん、アランちゃんに何か言っただしょ」

「いや、その……かるーく、ね。正直、ここまでうまくいくとは思わなかった」

なみなみならぬ本気オーラを纏ったアランの背中を見ながら、ノブと五十嵐はぽつりとそうこぼしたのだった。

五十嵐は商品販促やブランディングなど、DICEブランドの根幹部分に携わる部署「広報宣伝部」に所属するDICE社員だ。

五十嵐が最優先すべきは、DICEの経営戦略室で設計された、年間の広告計画を実行させていくことであり、DICEブランドをより広く知らしめ、会社に利益をもたらすことだ。

ゆえに五十嵐は、機転を利かせてアランとクロシエのプレイ動画を記録することにした。もし、Twinkingとのコラボレーションフォトが撮れなかった場合、動画をコラボレーション企画として公開するためにだ。

アランを焚きつけたのは、ほんの軽い気持ちだった。

アランとクロシエが多少ライバル意識を出してくれば、動画は盛り上がるに違いないと思ったからだ。

だが——五十嵐はアランを焚きつけてしまったことを少し後悔していた。

「なんだか、すごいことになったわね」

目の前の光景を見たノブが、そんなことを呟く。

辺りに散らばっているのは、無残なサハギンの骸と、彼らが残した素材の数々。

「なんだか、すごいことになった」

五十嵐がノブと同じセリフを吐く。

彼が見落としていたこと。それは、単純なのは、アランだけではなかったことだった。

「サハギンはすべて自分が斃す」と言い放ったアランの言葉に、今度はクロシエのスイッチが入ってしまったのだ。

悪鬼羅刹のごとく白刃の刀を振りかざし、現れた瞬間にサハギンを一撃で斬り伏せるアラン。

漆黒の血族に匹敵する力を持つ「魔王マダダ」を彷彿させる凶悪な魔術のコンビネーションを放ち、サハギンの集団を消し炭へと変えていくクロシエ。

トッププレイヤー同士の争いは、ムラウ鍾乳洞を破壊してしまうのではないかと思うほどに熾烈を極めていた。

「……ノブさん、カウントは？」

つい今しがた【雷系】の初期魔術【ボルテージ】からのコンビネーションで詠唱時間を短縮した、強力な【ライトニングチェイン】でサハギンの集団を瞬殺したクロシエがぼつりと囁く。

【ライトニングチェイン】は、放たれた雷が敵から敵へとつながっていく魔術で、多くの敵にダメージを与えることができる集団戦に向けた魔術だ。

「ええと……今ので二十五体ね」

「そうですか。これで並んだな、アラン」

涼しげに語るクロシエ。その視線の先には、クロシエと同じくサハギンを処理し終えたアランが余裕の表情を浮かべている。

「よく食らいついているな。そこは褒めてやるよ、クロシエ」

「それはこちらのセリフだ。すぐにお前は、私の前にひれ伏すことになる」
にやりと笑みを浮かべ合う、ふたり。

ふたりが倒したサハギンの数をノブと五十嵐がカウントすることになったのは、ある意味必然だった。宝物を見つけた子供のようにサハギンに飛びかかるふたりの争いに白黒つけなければ、撮影スタッフの救出どころではなくなるからだ。

アランとクロシエの動画はあくまでバックアップであり、本来の目的は、撮影スタッフを救出して、写真を撮ることだったはず。

焚きつけた五十嵐自身がそんなことを考えてしまうほど、状況は予想していなかった方向へと進みつつあった。

「しかし、だいぶ奥まで来たな」

「まもなくC2地点だな」

同時にMAPを確認するアランとクロシエ。

ムラウ鍾乳洞に入ってから、十五分以上経過している。

すでに二ヶ所、開けた場所を通過している。撮影スタッフたちの情報が正しければ、彼らがいるのはこの先だ。

手当たり次第にサハギンを斃^{たお}してきたアランだったが、次第にサハギンのレベルが上がっている

ことを実感していた。

そろそろ上位種であるサハギン・ハンマーヘッドが現れてもおかしくない。

だが、そう考えながらも、アランにはひとつ気になることがあった。

「どう見る、クロシエ」

ダンジョンの奥を見据えながら、アランが訊ねた。

「サハギンが減っていることか？」

魔術を使ったことで減ったスタミナを回復させるために、元氣藥を両手に塗布^{とふ}するクロシエが答えた。

アランが気になっていること。それは、目的のC2地点に近づけば近づくほど、現れるサハギンの数が減っていることだった。

ムラウ鍾乳洞の再配置^{リポッ}間隔はおおよそ三分ほど。この先にいる撮影スタッフと同行している護衛のプレイヤーが倒したとしても、既に再配置^{リポッ}されていておかしくない。

「私に思い当たるフシがひとつある。あまりよくない予想だが」

「気が合うな。俺もひとつある」

それは熟練者ゆえの予想だった。

ドラゴンズクロンヌには、ドラゴンハンターとして名を馳^はせていくメインストーリーと、この世界を深く楽しむためのサブストーリーが用意されている。

メインストーリーは主にハンターズギルドを中心に進んでいくが、サブストーリーは世界中に点在しているNPCとの会話から始まることが多い。

例えば、婚約者を盗賊に殺され、復讐に燃える男と敵討ちをするというものもあれば、フィールド上で採取に勤しむ薬の調合師から、とある薬草を取ってきて欲しいと頼まれるものもある。

そして、ここムラウ鍾乳洞にもひとつ、サブストーリーが用意されていた。

その昔、プラージュ諸島をサハギンから救った「海の女神トリトン」のサブストーリーだ。

「誰かがクエストを受けた、か」

「撮影スタッフの誰かだろうな。NPCに助けを求めて、運悪くサブクエストが始まったということだろう」

ムラウ鍾乳洞で受注できるサブクエスト「女神トリトンの願い」――

そのクエストを受けることで、ムラウ鍾乳洞に変化が生まれるのを、アランは知っていた。昔、このサブクエストをクリアしていたからだ。

クエストの概要はこうだ。

かつて、海王ロンギヌスの願いに報いるべく降臨した海の女神トリトン。

彼女の活躍で、人々を苦しめていたサハギンたちは島々から駆逐され、プラージュ諸島には平和がもたらされた。

だが、トリトンが母なる海に戻り百年が経ち、プラージュ諸島に再び脅威が迫りつつあった。

プラージュ諸島を我が物にせんとする「サハギンの王」の脅威が――

「うわああああッ！」

「……ッ!？」

突如響きわたる男の悲鳴。声が放たれたのはこの先、撮影スタッフがいるという地点からだ。

「クロシエ！」

「ああ」

「五十嵐さんとノブさんは俺たちの背後に！」

五十嵐たちの返事を待たずにアランは地面を蹴った。遅れて後を追う、クロシエ。

その行く手をふさぐようにサハギンが現れるが、アランの刀と、クロシエの魔術が間髪をいれず排除する。

「くっ、来るなあ！」

今度は、はつきりと悲鳴が聞こえた。

こちらに向かってきているのか、声が次第に大きくなる。

闇の向こうに、いくつもの松明の明かりが見えた。

そして、その光を伴わせながら現れたのは数人のプレイヤーだった。彼らが着ているのは、ゲーム内ではあまり見ない五十嵐と同じビジネススーツ。彼らが「twinking」の撮影スタッフだということが、アランにもすぐにわかった。

「クッ、クロシエ!? 来てくれたのかっ!」

「無事か?」

「ああ、あいつだっ! あいつに護衛が皆やられたッ!!」

クロシエに飛びついたのが「winking」の営業なのだろうか。

この面倒の発端である彼に、皮肉のひとつでも言ってやろうかと思ったアランだったが、すぐに意識を前方へと戻した。

「な、なんだありや……」

驚嘆の声を漏らしたのは五十嵐だ。ノブは声すらも出ないという雰囲気だった。

どすん、と洞窟が揺れる。

恐ろしい肉食獣のように、喉を鳴らす影。

闇の中に赤い目が光った。

「クロシエ、勝負はイーブンだ。決着は、奴との戦闘で決めよう」

「わかった」

正面を見据えながら言葉を交わすアランとクロシエ。

現れたのは、一匹のサハギン。

だがそのサハギンは、これまで倒してきたものとは明らかに違っていた。

それが纏っているのは、深い暗闇がうごめいているかのような、漆黒の鱗。

そして、他とは比べものにならないほどの巨大な身体。
ムラウ鍾乳洞のサハギンたちを統べる王——
このサハギンの王は「アンフィスバエナ」といった。

アンフィスバエナは、単純にサハギンを巨大にしただけのボスMobではない。
両方向に進めるといふ名前が語っているように、物理攻撃と魔術攻撃の両方に長けたMobだった。

だが、アンフィスバエナの恐ろしいところは、それだけではない。身体を覆っている「メランコリア」と呼ばれる黒い体液は、触れたプレイヤーのすべてのステータスを一時的に低下させる【ダメージ】の状態異常を与えるのだ。

アンフィスバエナと対峙する際は、まず遠距離からの攻撃で黒い体液を剥ぎ取るところから始める必要がある。

それが最適な攻略法で、もっとも安全な方法。

だが、アランが取った戦法は、そのセオリーを完全に無視していた。

「先にいくぞ」

いつものように【下段構え】から発動させる【地走り】。

そして、アランは月歩と同じ要領で、その動作をキャンセルさせた。

通常では繋がらない【中段構え】の【壱号弾】へ繋げ、アンフィスバエナの脇腹から刀を振り上げる。

舞い上がるヒットエフェクトと黒い体液。

アンフィスバエナの巨体が浮く。

刹那、放つのは月歩。

空気が割け、光のラインがぐるとアンフィスバエナの身体を駆け抜けた瞬間、空中で待ち構えていたアランは、浮いたボスMobの身体を地面へと叩きつけた。

「お、おお……っ」

揺れる大地。轟く衝撃音。

思わず感嘆の声を上げてしまった五十嵐だったが、驚きはそれだけでは終わらなかった。

「トラップライト」

杖を掲げたクロシエが、静かに詠唱する。

杖が青白く輝き、ビリ、と空気が振動した瞬間、地面から現れた光輝くトラバサミが、アンフィスバエナの両脇から襲いかかった。

トラバサミが閉じたと同時に、雷鳴が耳をつんざく。

破裂した電撃が辺りに飛び散り、衝撃波が術者であるクロシエの髪を揺らした。

「セオリーを完全無視か、アラン」

「やりたいようにやるのが俺流だ」

再びもとの位置に戻ってきたアランに、クロシエが無表情のまま問う。

誰にも指図されことなく自由にプレイする。それがアランのプレイスタイルであり、強みでもあった。

「しかし、相変わらず頑丈な奴だ」

ぼつりとクロシエが漏らす。

普通のサハギンであれば、アランのファーストアタックで藻屑になっているはずだ。さらに、【雷系】の上級魔術【トラップライト】まで食らったとなれば、漆黒の血族であろうとも無傷ではいられない。

だが、アンフィスバエナの体力ゲージにあまり変化はなかった。

その身体を覆う黒い体液が、ダメージを吸収しているのだ。

まず黒い体液を剥ぎ取る必要があるもうひとつの理由がそれだった。

「クロシエ、まずはどっちが黒い体液を剥がすか勝負するか？」

「いいだろう。望むところだ」

不敵に口角を吊り上げるクロシエに、アランも笑みで答えてやった。

最初アランは、クロシエよりも自分の方が優れていることを知らしめようと思っていた。ランキ

ングトップが二位のクロシエに劣^{おと}っているわけではない、と実際に見せつける必要があったからだ。しかしいつの間にか、アランはクロシエとの勝負を楽しんでいた。

アランはこれまで自分と肩を並べるプレイヤーとともに戦ったことはない。

一時期所属していたクロノのクラン「Grave Carpenters」もアランを満足させることはできなかったし、PVPを挑んできた猛^も者^さたちもアランの欲求を満たすことはできなかった。

だが、クロシエは違った。

勝つか、負けるか。はじめて体験するヒリヒリとした勝負に、アランは夢中になっていた。

「……ハッ」

思わずアランが笑みをこぼす。

アンフィスバエナとの距離を二、三步詰めると、アランはすりと刀を鞘^{さや}の中へ収めた。

そして、抜刀。【居合い】の構えから放たれる最速の斬撃、【薄刃陽炎^{うすば かげろう}】だ。

白刃^{きり}が煌^{きら}めく。

それは、エドガーで放つものとは比べものにならないほどのスピードだった。

俊敏^{しゅんべん}性^{せい}ステータスが限界値まで達しているアランの【薄刃陽炎^{うすば かげろう}】を視認するのは不可能だ。認識できるのは、鯉^{こい}口^{ぐち}を切る瞬間だけ。

斬撃の後に残るのは、遅れて表示される攻撃が命中したエフェクトと、横たわる屍^{しかばね}だ。

「ボルテージ」

だが、クロシエも負けてはいない。

瞬時に【雷系】初級魔術【ボルテージ】の詠唱が終わり、アンフィスバエナの脳天に落雷が直撃する。

ばしん、と広がる電撃。

表皮を駆け抜ける稲光。

アンフィスバエナの動きが止まった。

瞬間、クロシエの身体がふわりと宙に浮いた。

「……ボルティックノヴァ」

その言葉と同時に、まるで妖精が舞うように、クロシエの周囲にいくつもの球電が躍^{おど}った。そして、球電たちはくると弧^こを描きながら空中へと消えていき――

「……ッッ！」

何が起きるのか、五十嵐たちにはわからなかった。

すべての音が消え去ったかと思った直後、アンフィスバエナの身体よりも巨大な雷槌^{らいつい}が天から舞い降りた。

巨大な雷槌^{らいつい}は、ムラウ鍾乳洞の地面をえぐり、水飛沫^{みずしごき}と砂煙を同時に噴き上げる。

後を追うように放たれた衝撃は、その場にいたすべてのオブジェクトを弾き飛ばす。

「うわああッ!!」

立ち読みサンプル はここまで

爆風に呑み込まれ、撮影スタッフが後方に吹き飛ばされてしまった。

どっちが天井で、どっちが地面かわからなくなるほどの衝撃。

アランとクロシエの勝負の行方を撮影している五十嵐は、慌てて視線をアランたちへ戻すと、自らの目に映った光景に、再び悲鳴に似た声を漏らしてしまう。

「なな、何だありや……」

先ほどまでアンフィスバエナがいた場所にもうもうと立ち上っているのは白煙だった。

巨大な雷槌によるブラズマを発生させるほどのジュール熱が、辺りの水分を蒸発させたのだ。

そんな白煙の中に、巻き添えを食らったアランと、術者であるクロシエの姿があった。

「俺がいるのに放つか、それを」

「私とパーティを組んでいるお前にはダメージはないはずだが」

クロシエが放った【ボルティックノヴァ】は、雷系ツリーの最上級に位置する最強魔術のひとつだ。

与えるダメージは桁外れで、瞬間火力に特化した侍ですら遠く及ばない火力を持つ。

だが、【ボルティックノヴァ】にはいくつか欠点がある。

ひとつは詠唱時間だ。

【ボルティックノヴァ】は、詠唱を開始してから発動するまで、二十秒近くの時間を必要とする。

その間はもちろん格好の的になってしまうため、コンビネーションで詠唱時間を短くするか、パーティメンバーが敵を足止めする必要があった。

